

熊谷寺の御詠歌

蓮 生 法 師 御作
松 濤 基 作曲

明るく ややゆっくり



ゆうこく じ 熊谷寺の御詠歌

れん せい ほう し 蓮 生 法 師 御作

浄土にも 剛の者とや 沙汰すらん 西に向かひて うしろ見せねば

このお歌は法然上人の弟子、蓮生法師がお詠みになりました。

蓮生法師は永治元年（1141）、武蔵国熊谷郷（現在の埼玉県熊谷市の一部）の領主熊谷直貞の子としてお生まれになりました。幼名弓矢丸、元服して熊谷次郎直実と名乗ります。保元元年（1156）16歳の時、源義朝公に従い武勲を立てました。寿永3年（1184）44歳の時、一ノ谷の合戦において笛の名手、平敦盛を討ち取りますが、世の無常を感じ出家の思いを強くします。ついに法然上人と面会することになり、法然上人は直実公に「罪の軽重を問わず、ただ念仏さえ称えれば、極楽に往生することができます」とお話しされました。その言葉を聞いて、「手足を切り、命を捨ててこそ往生できる」と思っていた直実公はさめざめと泣いてしまいました。家督を子の直家に譲り、直実公は法然上人の弟子となります。自らは、法力坊蓮生と名乗り、人からは蓮生法師と呼ばれました。蓮生法師は念仏の教えを故郷の人々にも伝えようとして武蔵に向かいます。法師は、いつのときでも西方浄土の阿弥陀仏に背を向けないという「不背西方」の教えを信じていましたので、東の方角である武蔵には馬に逆さに乗り、西に向かつてうしろを見せないようにして行かれました。その時のことを詠まれたのがこのお歌です。

このお歌を「熊谷寺の御詠歌」と呼ぶのは、熊谷寺が蓮生法師の生誕し往生なされた所に建てられた寺であり、蓮生法師がそこに向かわれた時のことを詠まれたことによります。

大意 私、蓮生は、その昔熊谷直実と名乗る武士として一ノ谷の合戦において平敦盛公を討ち取りました。その時より世の無常を感じ、法然上人の弟子となりました。上人より、いつのときでも西方浄土の阿弥陀仏に背を向けないという「不背西方」の教えを頂き今日に至るまで実行しています。このたび武蔵に向かうにあたり、馬に逆さに乗り、西に向かつてうしろを見せないようにしています。この私の姿を見て、極楽浄土においても、私のことが剛の者（意志の強い者）と、沙汰する（評判になる）ことでしょう。「不背西方」の教えの通り、西に向かつてうしろを見せないようにしているのですから。